

〈近代本論第十六回：キーワードと年表〉

1. 年表

- 1792 ロシア遣日使節アダム・ラクスマン、漂流民大黒屋光太夫（1751～1828→『北槎聞略』1794）を同伴して根室に来航、老中松平定信は通商を約した
- 1804 ニコライ・レザノフ長崎来航、幕府通称拒否（定信は既に失脚）
- 1807 アメリカのハドソン川にて、外輪式蒸気船クラームント号の進水式成功（商用蒸気船の本格化）
- 1808 イギリス軍艦フェートン号、長崎出島に侵入（フェートン号事件）
- 1825 異国船打払令
- 1839 〈蛮社の獄〉 渡辺崋山、高野長英の死
- 1840～42 アヘン戦争（→南京条約）
- 1845頃 英国海軍で外輪式からスクリュー型蒸気船への転換が始まる
- 1853（7月8日）海軍提督マシュー・ペリー率いるアメリカ海軍東インド艦隊（二隻の外輪式蒸気船、二隻の帆船）が浦賀に来航。
- 1854（2月11日）ペリー再来航（蒸気船三隻、帆船三隻）
- 1854（3月31日）日米和親条約（神奈川条約）締結、6月、下田条約（和親条約の細則）締結、下田、箱館（函館）の開港、鎖国の終焉。
- 1856（6月28日）アロー号事件、後に駐日英国公使となるハリー・パークス（1828～85）は広東領事として事件に関与した
- 1856（8月）タウンゼント・ハリス、アメリカ公使として下田に着任、通商条約の交渉を老中阿部正弘と行う
- 1856～69 アロー戦争＝第二次アヘン戦争（→天津条約）
- 1857（八月）老中首座阿部正弘急死、堀田正睦老中首座に、条約勅許運動開始
- 1858（4月）堀田正睦、条約勅許獲得に失敗、失脚。井伊直弼大老となる。勅許なしの条約締結に踏み切る
- 1858（6月19日）日米修好通商条約締結
- 1858（7月10日）日蘭修好通商条約、不平等条約
- 1858（7月11日）日露修好通商条約、不平等条約
- 1858（7月18日）日英修好通商条約、不平等条約
- 1858（9月3日）日仏修好通商条約、不平等条約、以上〈安政五カ国条約〉
- 1858～59 安政の大獄（吉田松陰、橋本左内他斬罪刑死）

- 1860 日本の蒸気船軍艦咸臨丸渡米（勝海舟、福沢諭吉）
- 1860 桜田門外の変 井伊大老暗殺
- 1862（9月）生麦事件
- 1863（8月）薩英戦争
- 1863～64 下関戦争（馬関戦争）
- 1864 仏国大使レオン・ロッシュ着任（～1868）
- 1865 英国大使ハリー・パークス着任（～1883）
- 1867 普墺戦争、プロイセン王国の主導する〈小ドイツ主義〉の勝利、オーストリア＝ハンガリー帝国の敗北、北ドイツ連邦成立
- 1867（10月）大政奉還、十五代将軍慶喜、将軍職を朝廷に返上 → 雄藩連合の首長格におさまろうとして失敗
- 1867（12月9日）王政復古、幕府および摂政関白職の廃止、三職（総裁、議定、参与）の設置を宣言 → 幕藩体制とともに旧公家体制も廃絶されたことが重要 → 天皇親政による集権体制の開始
- 1868（1月）鳥羽伏見の戦い、旧幕府軍、圧倒的兵力差にもかかわらず薩長連合軍（土佐藩士も参加）に敗北
- 1868～69 戊辰戦争
- 1868（3月）五箇条の誓文
- 1869（5月）箱館戦争、五稜郭落城
- 1869（6月）版籍奉還 諸藩の土地（版）戸籍（籍）の朝廷への献上、幕藩体制の実質的な終焉 木戸孝允等が中核となって動いた
- 1870（6月）神田孝平〈田租改正建議〉提出 → 地租改正原案
- 1870～72 〈四民平等〉の基本政策実施（平民の苗字許可、華族、士族との通婚許可、国民皆学制度）
- 1870～71 普仏戦争 → ドイツ帝国成立（71年1月）
- 1871（8月）廃藩置県 府藩県の混在を統一して、集権化を開始した 木戸、大久保が中心になり、西郷を説得する形で成立
- 1871（11月12日）岩倉使節団（米欧回覧使節団）出発
- 1871（12月6日）岩倉使節団、サンフランシスコ着
- 1872（2月3日）ワシントンにて条約改正の予備交渉開始。これは予定外の行動で、現地外交官の森有礼らの主張を容れたものだった（これが誤りであったことはすぐ明らかになる）。
- 1872（6月17日）条約交渉打ち切り 岩倉使節団の大目的は惨めな形で頓挫した
- 1872（7月1日）条約改定期限経過、条約改正の最終的失敗
- 1873（3月15日）ドイツ帝国首相オットー・フォン・ビスマルク（1815～1898）、使節団を晩餐会に招待。ビスマルクの演説。副使木戸孝允はビスマルクの右に座り歓談した。
- 1873（6月）使節団、ウィーン万博を参観
- 1873（7月）地租改正

- 1873 (7月) 森有礼帰国、同年秋に明六社結成、西周、福沢諭吉等の参加
- 1873 (9月13日) 岩倉使節団帰国 (これより先、大久保利通は5月に、木戸孝允は7月に帰朝していた)
- 1873 (10月) 征韓派の敗北、西郷、板垣、江藤新平等の下野、大久保利通実権を握る → 内務卿独裁の開始
- 1874 (1月) 民撰議院設立建白書
- 1876 (8月) 秩禄処分 封建的家禄の全廃、代償としての国債贈与 華族クラスの上位者は金融ブルジョワへと変容し、中士、下士クラスは〈士族の商法〉によって没落していった
- 1877 西南戦争
- 1878 『米欧回覧実記』刊行、回覧の一次資料は皇居の火災により失われた。編者の久米邦武はそれを日記等により独力で再編した。久米は佐賀藩の出身で、名君と言われた鍋島直正の近習を務めた過去を持つ。父邦郷は藩政改革を進めた有能な有司であった。

2. 〈黒船〉の背景 (根本的動因) の認識

- = 〈文明化イデオロギー〉 (列強植民地主義) の認識
- 維新国家統一期には問題は棚上げされていた
- 維新後の近代国家草創期にそのモデル構築との関連でこの問題が自覚された
- 〈米欧回覧〉の課題となる

3. 明治初年度における近代化理念の二項分岐と融合

- 用語 (理念) の確立
- 〈開化〉 = 近代化、近代的啓蒙を含意 (漱石もこの語法に従う)
 - イデオロギーではなく、エートス面を主体とする
- 〈文明〉 = 西洋文明
 - 制度、イデオロギーを主体とする
 - 〈国民国家 (草創)〉と等置 (福沢諭吉『文明論之概略』)
- 〈文明開化〉 = 西洋文明をモデルとする近代化
 - アンビバレンツの顕在化 (鹿鳴館的欧化の限界認識)
- 〈文明化イデオロギー〉 (= 列強植民地主義) の認識始まる
 - 〈米欧回覧〉の内実

4. 〈米欧回覧〉 (1871年11月～1873年9月)

- 近代国家草創の青写真作製
- 征韓論への対処が最初の成果
- 元々は不平等条約の改正を目指していた (期限は1872年7月)
- それに加えて、近代化のモデルの探索 (モデル国の同定)

5. 条約改正の失敗 → 視察に集中 → 近代化の青写真
- 大目的の失敗は痛手だった → 脱力感 → 客観的観察始まる
 - 志士本来の〈強み〉である好奇心と行動力が顕在化する
 - システマティックな観察と評価を可能にした
 - 近代国家の全体像の模索 → 青写真の作成
 - 世界に類を見ないユニークな国家プロジェクトの成功
 - 近代化に際して、政権中枢が、これほど時間をかけて全体の青写真を模索した国は他に存在しない（遅れて近代化に進んだ、ドイツ、イタリア、オーストリア、ロシアとの比較）
 - 日本近代化の〈英雄時代〉の始まり
6. 客観的観察のモデル → 先駆型は福沢の初期啓蒙活動
- 『西洋事情』の〈蒸気船〉記述の客観的事実性（引用1）
 - 黒船来航から十三年で西洋の〈百科事典〉の記載スタイルまで辿り着いた
 - それは蘭学—洋学の文脈でも最先端の記述様式だった
 - そのアングルから、蒸気船と近代化の本質連関も正しく認識される（引用2）
 - 〈文明〉との出会いの初期につきまとった物神性、強制された〈文明化〉イデオロギーの科学的脱色
 - 幕藩体制内部の民衆の屈折（「たった四杯で 夜も眠れず」）と比較すると、主体的啓蒙化がたしかに進行していたことが確認できる。

引用1

〈蒸気船 蒸気船は^{アメリカ}亜米利加合衆国の發明なり。千七百八十年の頃より工夫を始めたれども、^{しばしば}屢失錯して功を成さず。千八百七年、ニューヨークのフルトンなる者、百二十馬力の蒸気船を^{つくり}造て^{はじめ}初て大成し之を試みしに、三十二時の間に百二十里を走れり。之を蒸気船の初とす。〉（福沢諭吉『西洋事情』選集1-130p）

引用2

〈これより^{その}其用法、^{ようや}漸く世に弘まり、初は川船及び内海の渡船に用ひ、次第に之を改正して、遂に軍艦、商船、飛脚船（※郵便専用船のこと）と為し、万里の大洋を往来して、暴風激浪の難を凌ぎ、攻防の勢力を強くし、貿易の便利を増し、航海者の勇氣、昔時に百倍せり。〉（同上）

7. 文明利器のハードは啓蒙が容易だった ⇔ 文明制度のソフトは了解困難だった
- 〈文明〉にとって自明のことが、最も理解が難しかったという福沢の回顧
 - ① 〈郵便制度〉の例（引用3）
 - パリで実見 → 〈飛脚〉制度との懸隔莫大

- ② 〈政党〉の例（引用4）
- 民間の集まりは幕藩においては〈徒党〉として取り締まりの対象となった
- それが議会制度では根幹の集団化の原理であることに驚く
- 福沢自身、後年（明治二十年）〈保安条例〉によって、〈徒党〉の首魁あつかいをされ、密偵監視の対象となった（古い専制パラダイムと新しい政経パラダイムの衝突）

引用3

〈彼の郵便事業の取調べに苦しむたるは、今に記憶に存して忘れず。仏京巴里在留中に、何れへか手紙を出さんとして、其手続を偶然来客の一人に尋ねしに、客は紙入より四角なる印紙（※切手のこと）を出し、此印紙を手紙に張て出せば直に先方へ達す可しと云ふ。夫れは飛脚屋へ頼むことかと問へば、否なとよ、巴里にそんな飛脚屋はなし、町内何れの処にも箱のやうなものあるゆゑ、唯その箱の中に投ずれば、手紙は自然に表書の届先に届くと云ふ。いよいよ不思議に堪へず。〉（福沢諭吉『福沢全集緒言』〈西洋事情〉、選集12—156p）

引用4

〈例へば、政治上に、日本にては三人以上何か内々申合せ致す者を徒党と称し、徒党は曲事（※悪事）たる可しと政府の高札（法度の掲示場）に明記して最も重き禁制なるに、英国には政党なるものありて、晴天白日、政権の授受を争ふと云ふ。左れば、英国にては、処士横議（※乱暴な議論）を許して、直に時の政法を誹謗するも罪せらるることなきか、斯る乱暴にて一国の治安を維持するとは不思議千万、何の事やら少しも分らずとて、夫れより種々様々に不審を起し、一問一答、漸くして同国議院の由来、帝室と議院との関係、輿論の勢力、内閣更迭の習慣等、次第に之を聞くに従つて、始めて其事実を得たるが如く、尚ほ未だ得ざるが如し。〉（同上、12—156p）

8. 日本の立憲、憲政にとって、〈政党〉と〈徒党〉の混同は、様々な強権側の混乱を引き起こした
- 福沢自身の〈政党〉理解の初期的困難は象徴的である
 - 根本には〈等族〉社会の未成熟がある
 - 〈政党〉は絶対主義下の〈等族〉における派閥形成を根源とする
 - それが自然に議会制度の集団化の構造原理として継承された
 - 江戸幕藩体制は絶対主義化を直前で止めた化石化の体制だった
 - 〈等族〉を認知することなく、士農工商という人為的な身分制を強制した
 - 〈等族〉形成の運動は農民に濃厚に見られたが、それはすべて〈一揆〉の枠で括られてしまい、制度経営の要素として認知されることはなかった
 - 自由民権運動の中で、ようやく士族と地主が〈等族〉類似の集団を形成した

- それが初期政党の基盤となった
- しかしそれは、広範な社会組織全体の〈等族〉化を背景とするものではない
- したがってそれは強権からは相変わらず〈徒党〉の範疇で括られ、弾圧の対象となった（三島通庸、品川弥二郎等）
- ここにおそらく立憲、憲政史の根本の問題が懐胎している（第七章での検証を予定している）

9. 福沢的啓蒙のもう一つの近代的達成

- 近代的システムの把握を目指す
- 近代都市の全体的把握が可能となる
- パリの大ホテルのシステム把握もその一部となる（引用5）

引用5

〈昨晚^{パリス}に^{ちかく}着。旅館ホテル・デ・ロウヴルに止宿す。館は王宮の門外に在り。巴里府最大の旅館と云。六層楼を^{わかち}分て六百室となし、旅客止宿する者、常に千人より下ラズ。婢僕五百余人、其他衣肆、浣衣婦、匠工等、此館に属せる者ありて、日用の事物は悉く館内にて便ずべし。館内の各処に婢僕の居室あり。^{ここ}爰より各室に^{テレグラフ}伝信機を通じ、各室内より婢僕を呼ばんと欲する時は、伝信機の線端を引きて^{あいず}号をなすべし。〉（福沢諭吉『西航記』選集1－25p）

10. 福沢的啓蒙の波及効果

- 『西洋事情』（1866年）は二十五万部のベスト・セラーとなった
- 志士は〈無学〉であり、しかも西洋の事情を知るマニュアル本を欲していた（福沢自身の説明）
- 『西洋事情』がそのニーズに応えた（引用6）

引用6

〈此無学の一流が（※すなわち志士たちが）維新の大事業を成して、^{きて}扱善後の一段に至り、鎖国攘夷の愚は既に之を看破して開国と決断したれども、国を開いて文明に入らんとするには、何か抛る所のものなきを得ず。流石の有志輩も当惑の折柄、目に触れたるものは近著の西洋事情にして、一見是れは面白し、是れこそ文明の計画に好材料なれと、一人これを語れば万人これに応じ、朝に野に、苟も西洋の文明を談じて開国の必要を説く者は、一部の西洋事情を座右に置かざるはなし。〉（『福沢全集緒言』〈西洋事情〉、選集12－158p）

11. 福沢的マニュアル → 〈米欧回覧〉への本質的影響

- 福沢の初期的啓蒙マニュアルは、〈米欧回覧〉に参加した元志士、青年官僚たちの観察眼を鍛えていた
 - = 近代的事実認識、システム把握のフィジカル・トレーニング
- 『米欧回覧実記』の〈水晶宮〉の記述は、すでに近代的名所旧跡の記述となっている（引用7）
- ブルクハルトの教養旅行マニュアル『チチェローネ』（1855年初版）が確立したスタイル（→ ベーデカー、ミシェランへ）
- 久米たちの観察眼の事実主義は、この同時代的水準に無理なく同化している

引用7

〈明治五年（一八七二年）八月十七日 晴 午後三時ヨリ「パークス」氏（維新時の英国公使ハリー・パークス）、「アレクサンドル」氏ノ誘ヒニテ、蒸気車ニテ「サイゼンハム」ニ至リ、水晶宮ヲ回覧ス。水晶宮ハ原名ヲ「キリスタル、パレイス」ト云。総玻璃ヲ以テ築キ成ス。是ハ一千八百五十一年ニ、倫敦ノ「バイトパーク」（※ハイドパークの誤り）ニ於テ、万国博覧会ヲ設ケシトキニ、彼地ニ建築シテ、出品ヲ陳列スルノ場トセルヲ、会畢リテ後ニ、此ニ引移シ、美観ヲ存セルモノナリ。全院悉ク鉄ヲ骨トシテ、満面玻璃ヲ以テ覆フ。風氣ヲ遮リテ、日光ヲ遮ラス。其長サ一千六百八尺（即百六十八間ナリ）ナリ。……〉（久米邦武編『米欧回覧実記』第二十五巻、〈倫敦府ノ記下〉、2-109f）

12. 〈米欧回覧〉の観察眼は現地でさらに鍛えられていった

- 〈文明化〉の暗部への視界
- ロンドンの裏社会概観（引用8）
- 格差社会の構造要因の認識（引用9）
- 条約改正の失敗が観察眼を鍛えた
- 不平等条約に内包される〈ダブル・スタンダード〉の改めでの自覚
- 〈文明化〉の〈ダブル・スタンダード〉の認識

引用8

〈少シク人行少キ街ニ至レハ、^{とうじ} 倅児徘徊シ、前ヨリ帽ヲ^{のが} 圧シ、背ヨリ懷ヲ探リテ逃レサル。殷劇ノ（※盛り場の）市ニハ、^{イタツラモノ} 拐児（※遊び人が）群ヲナシ、数歩ノ間ニ、金鎖玉鈎（※宝石の装飾品）^{うゆ} 烏有トナル（※スリに盗まれて消えてしまう）。少シク^{りょうらく} 寥落ノ郷ニハ（※さびれたあたりでは）、短銃ヲ携へ、毒薬ヲ懷ニシテ、行旅ヲ悩スノ賊アリ、鉄道汽車ノ上ニハ、博徒^{カタリ} 拐児、各車ヲ回リテ^{イナカモノ} 田舎漢ヲ誦誣ス（※うまくだます）。之ヲ聞ク（※以下のことを聞いたことがある）、倫敦ノ内ニ、入水ノ河アリ（※投身自殺の名所がある）。窮困ノ男女、此ニ投身スルモノ、常ニ絶ヘス。悪党ノ房アリ（※たむろしている巢窟がある）。百種ノ無頼^{ばくえき} ミナ集リ、賭博ヲ張り、鴉片ヲ吸ヒ、悪状^{あへん} ミナ備ルト。〉（同上、第二十一巻〈英吉利国総説〉、2-40p）

引用9

〈富ムモノハ日ニ富ミ、貧ナルモノハ終身^{きつまつ}屹屹トシテ（※困窮して）、僅ニ自ラ食スルノミ。國中ノ民貧富ノ均シカラサル如此^{かくのごと}シ。故ニ險ヲ越ヘ遠キヲ渡リテ他方ニ営ム（※異郷で生活をたてようとする）。英人ノ米ニ移ルモノ、年々十二万人ニ及ヒ、其他^{カナダ}加掌陀、「オオストラリヤ」ニ移ルモノヲ并セ計フレハ、殆ト三十万口ニ及フトナリ。米国ノ植民ハ、英国ト独逸トノ移住民ヲ仰ク。移住民ノ多キハ、其国生計ノ難キ^{しるし}徴ナリ。〉（同上、2-40p）

13. 〈米欧回覧〉プロジェクトの立ち上げ

- グイド・フルベッキ（1830～98）、大隈重信案（明治元年六月）
- 新政府の近代制度視察を提案（幕府雄藩留学生の本格化）
- 新政府の要人使節団に拡大（大久保利通日記、明治二年一月、引用10）
- 新政府の最大案件は〈士族〉のソフト・ランディング
- 版籍奉還（1869年） → 廃藩置県（1871年） → 秩禄処分（1876年）へと続く流れ
- 木戸孝允がその中心にいた（遅れて大久保の参加）
- 集権化のモデル探索 → 〈米欧回覧〉の拡張プロジェクトへ
- その段階で、〈条約改正〉が浮上する（木戸孝允日記明治四年八月 引用11）
- 現地で根回しをし、日本で本交渉の予定だった（したがって72年7月までに帰国し、交渉を始める必要があった → 初期の回覧プランはより早く出発し、それまでに帰国するものだったと思われる）
- ここでも木戸が中心になった

引用10

〈明治二年一月十七日 外国に公卿四五名、諸藩の士精撰を以て遊学仰せ付けられ候儀、今日急務の一条。〉（『大久保利通日記』下12p）

引用11

〈明治四年八月二十日 右院にて条約改正の御評議あり。〉（『木戸孝允日記』上90p）

14. 〈米欧回覧〉の出発の遅れは、宮中神祇派の一掃のためだった

- 木戸日記に頻出する〈朝廷不良之徒〉
 - = 廢仏毀釈を断行した平田国学派、初期国体論派
- 祭政一致勢力の一掃が近代国家草創に不可欠であることを木戸たちは認識していた（大久保、岩倉と共働している）

- 西郷もこの近代化に協力した（留守政府首班格として、宮中改革、近衛兵創設を続けている）
- この整理が一段落すると、すぐにメンバーを決めた
- 政府首班を含め、要人五十人前後、留学生六十人前後の大使節団。平均年齢は三十歳前後ときわめて若かった
- 直前に再度条約改正交渉の手順を決めている（木戸日記、明治四年十月 引用 1 2）

引用 1 2

〈明治四年十月二十日 雨 九字（※時の宛字）過外務に至る。改訂する所の条約を調へり。〉（『木戸孝允日記』上 1 1 1 p）

1 5. 最初の訪問国アメリカでの条約交渉失敗

- 使節団と現地外交官との齟齬（岩倉、木戸 ⇔ 森有礼他）
- 木戸たちは当初視察を行いながら、交渉の根回しをし、本交渉は帰国後に各国大使と行うつもりだった（現地情報+地の利）
- そのため、条約交渉の全権は持たないまま出発した
- 現地で森たちが現地交渉の有利を強く説いた → 伊藤も途中から同調
- その方針にひとまず決定し、伊藤と大久保が中途帰国して、留守政府と交渉し、条約改正批准の全権勅許を得て戻る（留守政府は懸念を示したが、最終的に同意）
- しかし最初の交渉国アメリカは、まず他の列強との〈一括交渉〉を拒否、日米間の条約についても、要求を拒否した
- 正式の交渉だったため、これで改正の機会を日本は失ってしまった（引用 1 3）
- 〈米欧回覧〉の大目的は頓挫した
- この背景には、外国の風土風俗に同化した〈欧化紳士〉（代表は森有礼）と、始めて外国を視察する政府要人たち（木戸、岩倉、大久保）の感覚の齟齬、隠然たるお互いへの反感があった
- 木戸は同化が過ぎる森の行動を激しく嫌悪した（引用 1 4）

引用 1 3

〈明治五年二月十八日（※木戸たちはワシントン滞在中） 雨 終日内居。条約一条を集義せり。此度俄にわかに大久保伊藤帰朝して条約改正の勅許を乞わんとす。今此挙動を反顧いたし候に、余等伊藤或は森ほぼ弁務使等の粗外国事情に通せしに託し忽卒こつそつ（※かるはずみに）其言に随ひ、天皇陛下の勅旨を再三熟慮謹案せざるを悔ゆ。実に余等の一罪なり。此度の条約、漫みだりに森伊藤の唱ふるところは、外国において結ぶに益ありと云。而して其実は其益はなはだ甚少し。〉（『木戸孝允日記』上 1 4 8 p f）

引用 1 4

〈明治五年三月八日 後刻、森弁務亦来る。過日来同氏の挙動意を得ざるものあり。米人却て能く我国の情を解し、我国の風俗を知る。然るに当時（※現在）留学の生徒等も我国の本来の所以を深了せず。容易に米人の風俗を軽慕しいまだ己の自立する所以を知らず。漫に自主とか、共和とかを唱へ軽躁浮薄、聞くに堪えざるものあり。すでに森等の如き、我国の公使にして公然外国人中にて猥りに我国の風俗をいやしめる風説あり。〉（『木戸孝允日記』上157p）

1 6. 〈欧化紳士〉の過剰同化の問題（森有礼他）

- 国の自主独立の前に、自己の自主独立を気取り主張する同化紳士たち
- 木戸はそこに主体性の喪失を見た
- 啄木の荷風批判に通じるものがある（「永井氏は、日本を去ってパリに行くべきである」云々）
- 亜流への転落の問題
- では日本の近代化はどう主体的に進めるべきか、そのための指針は何か？
- 〈回覧〉本来の課題意識の深化
- 行動の人木戸は、早速英会話を速習し、米国憲法を訳させて研究を始めた
- 日本の表層的欧化に対し、欧米には日本趣味が存在する
- その日本趣味は、欧化による意匠文化の崩れに気づき、惜しんでいる（引用 1 5）
- 近代化と国際貿易の相互性の繊細な観察

引用 1 5

〈陶器を製造するを見る。本邦のものを摸せしもの甚多し。本邦の品近来従前の形ちを変して製造す。しかるに従前の形ち尤も称ふべきもの多し（※開化以前のものがよい）。今日の様子、漸漸其美を捨るを嘆すと語れり。近来当世流の邪鄙なるものを製し、又は西洋等に摸するもの却て我自然の風のよろしきものを廃棄せり。〉（同上、中270p）

1 7. 近代化のモデル探索

- ① イギリスとの類似点 → 島国、人口規模（引用 1 6）
- しかし〈営業力〉は格段の差
- ② フランスとの類似点 → 体格、活発さ、工芸（引用 1 7）
- 小国の独立の気概に注目
- ③ プロイセン・モデルに辿り着く

引用 1 6

〈此聯邦王国ノ総幅員（※総面積）ハ、十二万三千三百六十二方英里^{マイル}ニテ、一千八百七十一年（※現在は1872年であるから去年の）ノ統計ニヨルニ、人口スベテ三千八百八十一万七千八百八十八人アリ。其形勢、位置、広狭、及ヒ人口ハ、殆^{ほとん}ト我邦ト相比較ス。故ニ此国ノ人ハ、毎^{つね}ニ日本ヲ東洋ノ英国ト謂フ。然^{しかれ}トモ、營業カヲ以テ論スレハ、其懸殊（※懸隔）モ亦甚シ。〉（『米欧回覧実記』第二十一卷〈英吉利国総説〉、2-22p）

引用17

〈仏朗西人ハ、体格長大ナラス。音声發揚シ（※はきはきして）、資性活潑ニシテ、氣力強健ナリ。英、及ヒ独逸ト反對^{はんたい}ノ性質ニテ、其弊ハ剽悍輕躁ニ流レ、忍耐強勉ニ乏シ。毎^{つね}ニ機敏ヲ以テ勝^{かち}ヲシム。粗^{ほぼ}我日本人ノ氣象ニ似タリ。〉（同上、第四十一卷〈仏朗西国総説〉、3-35p）

18. 近代化のプロイセン・モデル

- 面積、人口の一致（引用18）
- いまだに農業国である（産業革命の初歩段階）
- 軍事大国として台頭中
- 英仏よりもモデルとして有益ではないか（引用19）
- ビスマルク演説（1873年3月15日）に感動する下地の形成

引用18

〈此（※プロイセンの）土地ヲ比較スレハ、正ニ我日本ト相^{あい}匹ス（※同等である）。其人口ハ少ナキコト約一千万ナリ（※明治初年度の日本の人口は3480万、プロイセンは2470万前後）〉（同上、第五十五卷〈普魯土国ノ総説〉、2-266p）

引用19

〈普国人民ノ營業ハ、重ニ農牧ニアリ。全国人員ノ半数千二百万人ハ、農ヲ業トスル家ナリ。此国ト英国トノ貿易ニテモ知ルベキカ如ク、農産ノ高ハ、有余ヲ（※余剰を）輸出スルニ足ル。此利益ヲ本トシ、兼テ礦業及ヒ制作ヲ務メテ、外国ニ貿易シ、海外ノ遠地ニモ航通スレトモ、英仏ノ両国、海商ヲ事トシ、製造元品ヲ、常ニ遠地ヨリ輸入シテ（※工業生産品の原料を遠隔地から輸入して）、自国ノ制作ヲ加へ、又外国ニ輸送シ、市儉^{しかい}ノ利ニヨリ（※市場の利潤により）、国ヲ富^{とま}スノ目的トハ異ナリ、是ヲ以テ其武巧ノ外ハ、甚タ遠国ニ著^{あは}レザレトモ、其国是ヲ立^{たつ}ルハ、反^{かえり}テ我日本ニ酷^{はなは}タ類スル所アリ。此国ノ政治、風俗ヲ、講究スルハ、英仏ノ事情ヨリ、益ヲウルコト多カルヘシ。〉（同上、第五十六卷〈普魯土西部鉄道ノ記〉、3-298p）

19. モデル探索の意識の深まり

- 英仏モデルは外面的にとどまった
- プロイセン・モデルは産業構造、貿易による国富の形成まで目配りされている
- ビスマルク演説への感動が〈回覧〉全体のハイライトとなる必然性
- ビスマルクへの心酔（大久保、伊藤他）は表層的、あるいは否定的に解釈されることが定型化していた
- それはプロイセン憲法への傾斜が否定的に見られたことと平行
- しかし〈回覧〉の事実を置いて見れば、ここにはあきらかに近代化過程そのものの共振、親和性が見られる
- 使節団はそれを主体的に選択している

20. プロイセン・モデルの選択 → プロイセン型憲法選択の前提となる

- 憲法制定のプロイセンへの傾斜も、実はこの時点ですでに始まっていたと考えるべきではないか
- 真の問題は、この傾斜が木戸、大久保、岩倉ぬきで、次の伊藤、井上たちによって成し遂げるしかなかったことかもしれない
- この政権中核部における求心力、権威の喪失（少なくとも当座の減少）が、儒教イデオロギー復古、国体論の伸張の余地を与えたとも見られる
- しかし近代国家の草創期にモデルが発見されたことの意味は大きかった
- そのモデルに沿って、急速に〈青写真〉が完成されることになる
- それは〈文明化〉イデオロギーとの、再度の対峙において行われた（次節）

（近代本論第十六回キーワード終わり）